

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04398

研究課題名(和文)音楽・舞踊・楽器のリンクによる教員養成プログラムの開発：ガムラン音楽文化を中心に

研究課題名(英文)The Development of a Teacher Training Program through the Integration of Music, Dance, and Musical Instruments: A Case Study of Gamelan Music Culture

研究代表者

川口 明子(Kawaguchi, Akiko)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：50466512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インドネシアのガムラン音楽文化を事例に、音楽・舞踊・楽器をリンクさせた教員養成における実践的な教育プログラムの開発を目指したものである。具体的には、国内外のガムラン専門家と協働して、ガムラン音楽および舞踊や衣装の着付けの体験学習、楽器学を応用した楽器のメンテナンス実習とそのドキュメンテーション、古典曲と現代曲による「動態」としてのガムラン音楽文化のレクチャー・デモンストレーションを実施し、検証した。その結果、音楽・舞踊・楽器をリンクさせることで、文化的・社会的背景を踏まえて「音楽文化を身体で学び教える学習」が深められることが明らかとなり、大きな成果があった。

研究成果の概要(英文)： This study attempted to integrate music, dance, and musical instruments into a practical teacher training program that would also serve as a case study of Indonesia's gamelan music culture. The following methods were adopted and verified in cooperation with gamelan specialists both domestically and overseas, specifically the practical learning of playing gamelan, dancing and wearing costumes, maintaining musical instruments by applying organology and documenting the process, and exploring gamelan music culture through lectures on and performances of classical and contemporary works.

The results of this program show that linking music learning with dance and musical instruments provided a socio-cultural context that allowed learners to experience music culture in a way that also increases their bodily knowledge, leading to improved learning results and deepened understanding.

研究分野：音楽教育 民族音楽学

キーワード：音楽文化 舞踊 楽器 ガムラン インドネシア 教員養成

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 多文化音楽教育とガムラン研究

情報や人が行き交う「文化の越境」が日常化した今、移民問題を抱える欧米各国を中心に多文化音楽教育が推進されてきたが、その萌芽となった考え方に民族音楽学者 M. フッドらが 1950 年代に提唱したバイミュジカルティがある。西洋音楽に加えて獲得すべきもう一つの音楽性の例として日本の雅楽やインドネシアのガムランが選ばれ、UCLA において実習が開始された。この波はその後欧米各国や日本に広がったが、数あるアジアの伝統音楽の中でも最も広く普及したのが、インドネシアのガムランである。

ガムランは、ゴング類や鍵盤打楽器類を中心とする合奏音楽で、主な地域様式に中部ジャワ、スダ(西ジャワ)、バリの3つがある。独特の音楽構造を持ちながらも、打楽器ゆえに親しみやすいガムランは、異文化理解に最適の体験教材として普及した。またインドネシアや欧米・日本等で、古典のみならず、ガムランの新作も数多く生まれており、今やガムランは「グローバルな音楽文化」として新しい展開を繰り広げつつある。

### (2) 日本におけるガムランの受容と研究の経緯

日本でも、民族音楽学者の小泉文夫が 1970 年代に東京藝術大学にガムランを導入して以来、大学を中心に普及し、今日では民間の演奏団体やガムラン教室もでき、東京、大阪を中心に多彩な活動を展開している。しかし、楽器のメンテナンスや演奏団体の後継者育成等が新たな課題ともなっている。

研究代表者は 1982 年以來、主にスダ(西ジャワ)のガムラン・ドゥグンと古典歌曲トゥンバン・スダを音楽教育と民族音楽学の分野から研究してきた。こうした研究を踏まえ、教員養成の場でもガムランの教材開発を進めるために、2009 年に科研の助成により岩手大学にガムラン・ドゥグンの楽器を導入した(課題番号 20830006)。その後、様々な授業での活用をはじめ、小・中学校での鑑賞教室や大学公開講座でのワークショップ等を学生と共に実施し、教育実践の場を広げている。

### (3) 日本の音楽科教育における「音楽文化」の重要性と事例としてのガムランの意義

現行の中学・高校の音楽科学習指導要領には、今までにも増して「我が国の伝統文化」および「諸外国の音楽」の重要性が強調され、「音楽文化の理解」が新たに目標に掲げられた。暮らしの中の音楽のあり方や音楽と舞踊との融合など、文化的・社会的・歴史的背景を踏まえた伝統音楽指導の一層の充実がうたわれている。また小学校を中心に「身体表現」も重要視されてきている。こうした情勢を反映し、小中高の教科書で「世界の音楽」も紹介されているが、そのほとんどは鑑賞教

材に留まっており、表現教材化は立ち後れている。また、大学の教員養成でも和楽器の実習は必修化されたが、「諸外国の音楽」の実習は極端に実践例も少なく、教育プログラムの開発が強く望まれる。

## 2. 研究の目的

本研究は、インドネシアのガムラン音楽文化を事例に、音楽・舞踊・楽器をリンクさせた教員養成における実践的な教育プログラムの開発を行うことを目的とする。具体的には、日本人およびインドネシア人のガムラン専門家や舞踊家と協働して、体験学習やその成果発表としての実習等を行い、それらの教育的意義を、以下の4つの視点から明らかにし、その上で「音楽文化を身体で学び教える学習」の教育プログラムとして提示する。

- 1) 音楽と舞踊の融合した音楽文化の体験学習とその文化的・社会的・歴史的背景(コンテキスト)の理解
- 2) 楽器学を応用したメンテナンスと持続的な楽器管理のスキルの獲得
- 3) 「動態」としての音楽文化への視座: 古典と現代曲によるコンサートより
- 4) 国内外の人的交流による多文化理解

## 3. 研究の方法

(1) 文献等による基礎研究とインドネシアでの事前調査、本調査及び事後調査

(2) 日本在住のインドネシア舞踊家をゲスト・ティーチャーとする音楽と舞踊をリンクさせた体験型の実習授業やワークショップの試行と教育プログラムの開発

(3) インドネシアよりガムラン専門家を招聘しての演奏と楽器メンテナンスの実習やドキュメンテーション、およびその成果発表としての研究会やレクチャー・デモンストレーションの実施と評価

(4) パラグナ・グループ(東京のガムラン演奏団体)を招聘してのレクチャー・デモンストレーションの実施と評価

(5) 研究の総括と教育プログラム案の提示

## 4. 研究成果

本研究では、調査地等について若干計画変更した部分もあったが、研究協力者の村上圭子氏(ガムラン演奏家、NPO 法人日本ガムラン音楽振興会代表)、阿部・アユ・イスカンドル氏(インドネシア舞踊家、盛岡市在住)の協力により、概ね計画通りに研究を進めることができ、以下の成果が得られた。

(1) 音楽文化における音楽と舞踊のリンクおよび表現教材の開発

研究協力者の阿部・アユ・イスカンドル氏と協働して、初心者用のインドネシア舞踊お

よび衣装着付けのワークショップ・プログラムを開発し、教員養成の授業においても試行した。近年、体育科でダンスが必修化されたが、このプログラムは、「音楽」と「体育」そして「総合」とのリンクも見据えた体験型の新しい表現教材の開発として評価できる。

#### (2) 楽器のメンテナンス実習とドキュメンテーション

ガムラン楽器作りの専門家として平成 28 年にヘディ・リスディアナ・リスコンダ氏を、平成 29 年にリスコンダ氏とヤナ・マルヤナ氏を招聘し、ガムラン楽器の調律法やメンテナンスについて実技と理論の両方から学び、ドキュメンテーションも行った。ガムラン楽器の中でも、特にこぶ付きゴングの調律方法については、今までに十分な研究がなされておらず、今回のメンテナンス実習とその記録は、学術的にも非常に貴重なものと評価できる。

また、学校現場では楽器のメンテナンスの知識や技能は必須であるにも関わらず、これまでの教員養成では見落とされてきた。その意味でも、本研究は、楽器学の視点や方法論を教員養成に取り入れるための先駆的な事例と言える。

#### (3) 音楽・舞踊・楽器をリンクさせた教育プログラムの開発

平成 28 年と 29 年に、岩手大学教育学部教員養成課程の学生を対象とするレクチャー・デモンストレーション「インドネシアの音楽文化と教育」を実施した。

平成 28 年は「ガムランと舞踊を中心に」をテーマに、ヘディ・リスディアナ・リスコンダ氏による楽器メンテナンス法やガムラン伴奏の人形劇ワヤン・ゴレックを紹介すると共に、阿部・アユ・イスカンダル氏によるインドネシア舞踊の鑑賞とワークショップを実施した。合わせて、岩手大学教育学部音楽教育科の学生による竹楽器アンクルンの演奏や西ジャワの学校でよく歌われているスダの合唱曲の演奏も行い、これまでのインドネシアの音楽文化の学習成果を発表・検証する場ともなった。

平成 29 年度は「伝統と現代」をテーマに、リスコンダ氏とヤナ・マルヤナ氏を講師に迎え、パラグナ・グループとの共演による古典と現代曲の生演奏により、伝統を土台としつつ時代に即した変容を遂げつつあるガムランの「グローバルな音楽文化」の現状を提示した。

音楽・舞踊・楽器をリンクさせたこの教育プログラムは、文化的・社会的・歴史的背景(コンテキスト)を含めて「音楽文化を身体で学び教える学習」を深めるものであり、実施後の学生を対象としたアンケートからも、その有効性が明らかとなった。

#### (4) 今後の課題

ガムラン楽器のメンテナンスについては、得られた情報や資料が膨大であり、今後それらの整理・分析を重ね、ドキュメンテーションとしてまとめることが課題である。また、今回試行・提示した教育プログラムの検証や持続的な改善と共に、ガムラン音楽文化を表現教材化するための映像教材の開発も、今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

川口明子、教材研究と指導法 ガムラン(インドネシア ジャワ島 バリ島) 音楽鑑賞教育、季刊 vol.27、2016、pp.46-47、査読無

川口明子、小塩さとみ、山下正美、教員養成・採用・研修における日本伝統音楽実技の現状と課題、音楽教育学、vol.45-2、2015、pp.59-63、査読無

〔学会発表〕(計 5 件)

川口明子、リスコンダ、ヤナ・マルヤナ、阿部・アユ・イスカンダル、パラグナ・グループ、レクチャー・デモンストレーション インドネシアの音楽文化と教育：伝統と現代、岩手大学教育学部音楽教育科川口研究室、岩手大学北桐ホール(岩手県盛岡市) 2017 年 10 月 27 日

パラグナ・グループ(川口明子を含む) 世界を聴いた男、民族音楽学者小泉文夫からのメッセージ オープニングコンサート スダの音楽、浜松市楽器博物館、浜松市楽器博物館(静岡県浜松市) 2016 年 10 月 23 日

パラグナ・グループ(川口明子を含む) バンドンからの音だより、静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター、静岡文化芸術大学自由創造工房(静岡県浜松市) 2016 年 10 月 22 日

川口明子、ヘディ・リスディアナ・リスコンダ、村上圭子、阿部・アユ・イスカンダル、レクチャー・デモンストレーション インドネシアの音楽文化と教育：ガムランと舞踊を中心に、岩手大学教育学部音楽教育科川口研究室、岩手大学北桐ホール(岩手県盛岡市) 2016 年 10 月 2 日

川口明子、阿部・アユ・イスカンダル、バリタ・マスリア、ワークショップ：教員養成のためのガムランと舞踊の教育プログラム、日本音楽教育学会東北地区例会、岩手大学(岩手県盛岡市) 2015 年 3 月 5 日

〔図書〕(計 1 件)

日本学校音楽教育実践学会(編) 川口明子他、音楽教育実践学事典、音楽之友社、2017、319(127,130)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 無し

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

川口 明子 (KAWAGUCHI, Akiko)  
岩手大学・教育学部・教授  
研究者番号：50466512

### (2)研究協力者

村上 圭子 (MURAKAMI, Keiko)  
NPO 法人日本ガムラン音楽振興会・代表

### (3)研究協力者

阿部 アユ イスカンダル  
(ABE, Ayu Iskandar)  
サンガル・アユ主宰